

岡山醫學會彙報

岡山醫學會通常會

同會は豫期の如く本月十八日午後三時十五分より岡山醫科大學附屬醫院南臨牀講義室に於て開會せり田村庶務主幹開會を告げ直ちに左の講演に移る

第一席 「スコポラミン」ト「モルフィン」トノ伍用ニ就テ

二、呼吸中樞ニ對スル作用

附、予ノ考案セル空氣瓣ニ就キテ

藥物學教室 西下正巳君

君は先づ君の考案せる新空氣瓣に就き説明し次に主題に入り左の如く講演せられたり。

「スコポラミン」は延髓の呼吸中樞を興奮さす作用あるが故に Schneiderlin, Kroff, Blos 等は「スコポラミン」は「モルフィン」と呼吸中樞に對して拮抗的に作用するものなりと考へたり。之に反して Bürgi は凡そ一つの有害作用即ち麻痺作用に第二の夫のみにては興奮的なる作用を加ふる時は麻痺作用は減少せらるることなく却て増大するものにして「スコポラミン—モルフィン」麻醉は此適例なりと論駁せり。其後實驗的研究よりして Smith は二十日鼠に於て石割氏は家兔に於て「スコポラミン」は「モルフィン」の呼吸中樞麻痺作用を相乘的に助くと報告せり。

此成績に據れば當該兩物質の呼吸中樞に對する關係は Bürgi の憶説に一致するもの如くなるも今日の藥物學的知見より考れば Bürgi の憶説には大いに疑を入る餘地あり尙ほ Smith, 石割氏の實驗には方法竝に實驗動物の選擇等に就て顧慮を要する點多々ありと考慮したるが故に余は綿密なる實驗方法によりて此關係を研究し次の如き成績を得たり。

「スコポラミン」は犬に於ては中等量に於て一般に正常の呼吸に對し興奮的に作用し且中等量の炭酸瓦斯の媒介により測定し得べき呼吸中樞の興奮性を亢進せしむ。而して「モルフィン」ノ適當量即ち pro Kilo 0.0025 又は 0.01g. と伍用すれば「スコポラミン」は同量又は倍量にて其呼吸中樞に對する麻痺作用を或程度まで弱むることを得。即ち「モルフィン」に對して拮抗的作用を呈するを見たり。

猫は「スコポラミン」に對して犬より鋭敏なるも、犬に於けると同様「スコポラミン」は一定量に於て正常呼吸中樞を興奮せしめ、且其興奮性を増大せしむ「モルフィン」どの伍用に際しても「モルフィン」pro Kilo 0.005 又は 0.01g. に對し「スコポラミン」は同量又は倍量にて明に拮抗的に作用す。

定兎は「スコポラミン」に對しては一般に鈍感にして且其感受性著しく動搖するが故に當問題の實驗動物としては適當なるものと謂ふを得ず。然れども注意して實驗する時は大多數に於て犬及び猫に於けると一致せる成績を得たり。唯少數の例に於ては如何に作用せるか判斷に苦しむものもなきに非りき。

注意すべきは以上の如き「モルフィン」どの拮抗作用を證明するには炭酸瓦斯の分量は過大なるを許さず。何となれば過量の炭酸瓦斯自身が「スコポラミン」と共に呼吸中樞に麻痺的に作用し得るを以てなり。(自抄)

第二席 腦膜炎性迷路炎ニ因リ均衡障礙ヲ呈セル家兎供覽

耳鼻咽喉科教室 笠井 經 夫 君

實驗的腦膜炎に續發せる迷路炎のため聾となり且前庭器障礙を呈せる家兎三頭を供覽したり。詳細は後日發表せん。(自抄)

第三席 「ヂギタリス」簇ノ強心作用ト「カルチウム」トノ關係

藥物學教室 富永 猪 佐 雄 君

追て本誌に於て詳細報告すべし。

第四席 二三固定法竝ニ染色法ノ比較ニ就テ

解剖學教室 醫學博士 上 坂 熊 勝 君
尾 藤 太 君

數種の固定藥の染色に及ぼす影響を論じ從來組織學的技術に於いては餘り注意を拂はれざりし、酸性色素は酸の添加によりて其の染色力を亢進せしめらる事實を研索し、彼のゲオルギーウイツの云へる事實に對し色素「アニオン」はH⁺イオン」と結合し分子の「ポリメリザチオン」又は「コンデンザチオン」を起し容易に物體に吸着す可き解離せざる遊離の色素酸が生ずるなりと説明し、之によりて胃の被細胞中の鹽酸の存在を或る程度まで證明し得るものならんと其標本を示して論じ又解離せざる色素酸分子は色素「アニオン」より強い吸着力を有してをらないと云ふ假定を否定するに尙ほ解離せざる遊離の色素基は色素「カチオン」より吸着しやすいと云ふ事實を以てせり。(自抄)

右終りて藤田會長閉會を告ぐ時に午後六時なり。